

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヘブライ語動詞におけるperfect / imperfect の本質
Author(s)	阿部, 節子
Citation	ニダバ , 14 : 15 - 20
Issue Date	1985-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047161
Right	
Relation	



ヘブライ語動詞における perfect / imperfect の本質¹

阿 部 節 子

古典ヘブライ語動詞の perfect と imperfect は、 tense の違いではなく、 aspect の違いを表わすとする考え方は、既に一般に認められているようにみえる。しかしながら、この問題には、まだどこか釈然としない感がつきまとっている。少なくとも、 aspect そのものの理解に補正を必要とするのではないかという思いが強い。

いわゆる「アスペクト説」によれば、古典ヘブライ語動詞の perfect は、過去・現在・未来の時間的な階位に関係なく、完了した動作、または、完了したと考えられる動作を表わす。一方、 imperfect は、過去・現在・未来に関係なく、まだ完了していない動作、または、まだ完了していないと思われる動作を表わす。

このように、 aspect は時階の区別に関係なく、動作をその様態において把えた見方である。換言すれば、それは、動作の「すがた」²と言えよう。例えば、動作が完了している、まさに始まらんとしている、継続中、または、継続中ではあってもほんのすぐ前に始まったばかりとか、すぐに終わろうとしているとか、反対に、むしろ静的、状態的であって、動作を考慮に入れていないものであるとか、もしくは、瞬間的であるとか、反復的であるかのよう。

さて、この問題について、簡単に研究の跡を辿るならば、組織的な研究は、19世紀に入ってから F. W. Gesenius の *Hebräische Grammatik* (1813) をもって始まったと言えよう。それ以前の研究については、一応10世紀初頭に遡って見ることができるが、³その多くは、アラビア語研究の影響を受けて書かれた断片的なものにすぎなかったり、あるいは、ギリシア・ラテン語文法の概念をそのまま引き写しにした説明が目立つ。ヨーロッパ中世時代を通して、ヘブライ語の研究が純粋に言語学的な興味というより、むしろ神学や聖書解釈学の一端として扱われたからであろう。そのために、ヘブライ語に対する興味は、主として個々の語の意味や形態、あるいは音韻の問題に終始し、動詞組織を系統立てて科学的に究めようとする試みは為されなかった。その意味で、Gesenius のヘブライ語の構造全体を展望しようとする研究態度は、ヘブライ語研究史上一つの新しい時代を画するものと言えよう。ただ、残念なことには、彼は文法的な説明をする際に、多くの場合、ラテン語文法の概念を採り入れ、動詞の接尾形 (perfect) と接頭形 (imperfect) の本質をあくまで時間の表出である

と考えている。

近代に入ってからの研究者の中で、Gesenius の他に、特に注目に値するのは H. Ewald⁴ である。彼は、それ迄の研究者達が preterit と future と呼び慣らしてきた動詞の接尾形と接頭形をはじめ perfect, imperfect と呼び、これら二つの活用形が表現するものは時階ではなく、動作・出来事に対する話者の主観的な見方や感じ方であると考えた。彼のこのような見解は、その時代にあつて極めて斬新であり、論理性に富んでいたが、まだ aspect の概念を導入するに至っていない。代わりに、彼は、動詞表現の主観性に注目して、その本質は mood であると考え、それ故、彼の説の影響を受けた研究者の中には、接尾形を first mood、接頭形を second mood と呼んだ者もあったほどである。⁵

ヘブライ語動詞には主観的な何かを表わす機能があるとした Ewald の考えに示唆を受け、更に詳細な分析を加えて、いわゆるアスペクト説に迄発展させた S. R. Driver の業績は、ヘブライ語研究史上もっとも重要なものの一つである。彼は、時間の概念の中に含まれている時階 (order of time) と時態 (kind of time) を区別して、ヘブライ語動詞に現れるのは前者、即ち、通常 tense と呼び慣らされているものではなく、後者、即ち tense とは根本的に性質を異にするものであると考えた。ここで言う時態とは、ある動作や出来事が、過去・現在・未来という抽象的に設定された時間の枠の中でどのような「起こり方」をするのかを表わす、いわば、tense という外枠の中に内在する様態のことである。それ故、perfect, あるいは、imperfect の名で呼ばれているものの正体は、話者の感じ方に起因する主観的な性質のもの、即ち、aspect であるとした点で、彼の研究は、Ewald から一歩進んだものと言えよう。

このように、ヘブライ語動詞表現の本質を tense ではなく、aspect に見ようとする S. R. Driver の説は、それ以後のヘブライ語研究の規範となったが、難を言えば、彼が perfect / imperfect という名称を用いたのは不運だったと思えてならない。何故なら、これらの名称には、伝統的に、ギリシア・ラテン語文法の先入観がつきまとっている上に、英語などの現代語における perfect tense, imperfect tense の意味と混同してしまうおそれがあるからである。また、彼が aspect の概念は把えていながら、相変わらず tense という名称で呼んだこともこうした誤解や混同を招く原因になっていると思われる。いずれにせよ、現在では大勢がアスペクト説を受け入れながら、ヘブライ語におけるその意味がいまひとつピンとこない理由の一端は、その辺にありそうである。

S. R. Driver のアスペクト説は、互いに多少の相違点はあるものの、A. B. Davidson, R. H. Kennett, M. Cohen, C. Brockelmann, S. Moscati⁶ 等多数の研究者によって受け継がれてきた。とりわけ Brockelmann は、ヘブライ語動詞の aspect に、「状態」(constative) と「連続」(cursive) の対立価値を見た。彼によれば、perfect は「状態」の aspect であり、完結した動作を表わす。一方、imperfect は、「連続」の aspect、即ち、動作が間断なく続いている過程にあることを示す。このように、ヘブライ語動詞の本質を明確に aspect として把え、しかも、ヘブライ語に固有の aspect 価を抽

出しようとした彼の試みによって、アスペクト説は真の意味で定着したと言ってよい。

上に述べたように、アスペクト説は巾広い支持を得たが、同時に、このような見解に対する批判もかなり強力であった。例えば、H. Bauer⁷は、セム語およびエジプト語の歴史的研究にもとづいてアスペクト説を否定し、ヘブライ語動詞の活用形が表現するものは、あくまで時間的な性質のものであると考えた。彼によれば、ヘブライ語は、本来単一、純粋な言語ではなく、おそらくは古いカナン土着言語と、征服者であるイスラエル人が持ち込んだそれよりも新しい西方セム語から成る混合言語である。歴史言語学において観察し得る一般的な言語現象から推して、古い方の土着言語は、時間表示の機能を全くもたない、言い換えると、どんな tense にも通用する動詞組織を有していたと思われる。これに対して、新たに混入してきた言語には、もっと発達した言語の特徴として、時間表示の機能が備わっていたと推測される。長い年月の間にこれら新旧の要素が融合し、あるものはもとの形のままで残り、あるものは原型をとどめぬ迄に変容し、また、あるものは完全に姿を消してしまったのであろう。旧約聖書をはじめ、現存するヘブライ語の資料は、こうした複雑な発達過程の産物である。ヘブライ語の動詞組織が本来どのようなものであったかを正確に再構することは、ほとんど不可能に近いが、単一の形でどの tense にも通用したと考えられる古い動詞組織にも、やはり何らかの時間表示のしくみがあったと見るべきであると Bauer は主張する。

アスペクト説に対して、特に激しく反論したのは F. R. Blake である。彼は、どんな言語であろうと、動詞に何らかのかたちで時間表示の機能がないケースはあり得ないと断言する。Bauer も指摘しているように、ヘブライ語動詞に二つの活用形があるのは、少なくとも二つ以上の言語が、それぞれ時代を隔てて融合し、発達して出来上がったというヘブライ語の背景に起因している。即ち、ヘブライ語動詞のもっとも古い系統は、人称接頭辞をもつ imperfect の形であり、主として動作を表わす predicate 動詞であったと考えられる。何故なら、一般に、もっとも原始的な動詞形と見做される命令形が、その形態から推して、明らかに imperfect から派生したことがわかるからである。participle や infinitive も、おそらく imperfect の派生形であろうと思われる。また、現存する資料に関する限り、いくつかの例外を除いて、条件法や仮定法の modal な表現は imperfect によって行われている。つまり、古いヘブライ語においては、動詞表現の全てを、または、そのほとんどを imperfect が担っていたと考えられる。一方、これと同じ位早い時期に、けれども、これとは全く別の流れから混入したのが perfect の形である。perfect は、predicate 形容詞に人称接尾辞が付くことによって発達した動詞形で、それ故、その主な働きは状態を表現することにある。このような背景のもとに発達したヘブライ語動詞の perfect と imperfect は、もともと何ら特定の時間を表示せず、代りに、そのような機能は他の構成要素、例えば、副詞等が果たしていたのではあるまいかと Blake は言う。perfect も imperfect も、時代が下るにつれて、それぞれ固有の時間表示をする機能をもつようになったと思われるが、こうした過程の中で更に周辺の言語が介入したために、さまざまな形態上の、あるいは意味上の変化が起こり、その結果、現存するヘブライ語は、まるで未完成のパス

ルのような容相を呈するようになった、と彼は見る。

Bauer や Blake の他にアスペクト説を否定するのは、O. L. Barnes, A. Sperber, J. A. Hughes⁹ 等である。しかし、彼等の主張するところは、概して先唱者達の発想をそのまま踏襲したものであって、体系的にまとまりのある研究成果を見ていない。

1960年代には、ヘブライ語動詞の研究に新しい展開が見られた。即ち、従来のように、単に動詞形と時間表現の関係を究明することから脱却して、aspect そのものの概念をより明確にしようとする動きが目立つ。このような傾向は、古典ヘブライ語のような古い言語を他の言語、特に、現代語に照らして観ようとする真の意味での現代的な研究態度や手法に負うところが多い。このようなタイプの研究者達の中で、その斬新な着眼点でとりわけ印象深い F. Rundgren¹⁰ は、プラハ学派の音韻論における対立論を応用して独自のアスペクト説をうち出している。ここでは詳細に触れることを控えるが、要するに、彼は、aspect をそれだけ取り出して検討せず、反対極のものと対照的に観察することによって、ヘブライ語動詞の本質が aspect であることを理論的に証明しようと試みた。彼の手法の論理性は、他の研究をはるかに凌いでいるが、とりわけ、文法カテゴリーの概念を明らかにしようと努めた業績は大きいと言えよう。

ただし、Rundgren の研究は弱点と思われるところがないわけではない。問題に対する彼のアプローチが演繹的であるために、どちらかと言うと原理の方が勝って、ヘブライ語資料から具体的に例証を引き出す努力が不足しているような印象を受ける。また、彼の研究には、通時的な考察があまり重視されていない。どんな言語の研究においてもそうであろうが、特にヘブライ語のような言語を扱う場合には、歴史的な背景を無視することはできないと思われる。

一方、D. Michel¹¹ は詩篇の研究から出発して、動詞の時間表現の問題に興味を持った。彼は、詩篇を解釈する際に、時間表現はあくまで文脈によって行われ、動詞形によって示されるのではないと考えた。従来の研究は、動詞の時間表示を正確に把えたいという先入観のために、なるべく時間表現がはっきりしている歴史書を資料として選ぶことが多かった。しかし、過去の出来事だけを語るテキストを扱う際には、とかく文頭の動詞を過去における動作・出来事を表わすと解釈しがちで、そのために後続の perfect consecutive や imperfect consecutive の意味を正確に把えられないでいる。このことは、とりもおさず perfect と imperfect 自体の本質も明らかにはならないということである。一方、過去も未来も昔のこととして表わす歴史書と違って、詩篇には、過去・現在・未来の時間がそのまま表現されているので、動詞形と時間表示の関係をもっと正確に観察することができる。

このような洞察を踏まえて、彼は perfect / imperfect には独立 (independent) / 依存 (dependent) の対立する意味があると結論する。即ち、perfect は、他の動作・出来事には無関係の、それ自体で独立した動作・出来事を表わすのに対して、imperfect は、他の動作・出来事の結果であったり、あるいは原因となるなど、他の何かと関連している動作・出来事を表現する。このような意味

は、perfect と imperfect に内在する本質的なものであって、たとえ WAW が介入しても変ることがない。それ故、彼は imperfect consecutive が perfect と同じ aspect を表わすという伝統的な考え方に疑問を抱いた。概して、彼の説明のし方は、主観的、直観的にみえ、論理性に乏しい感じを与えるが、それは、原理を踏まえて論を展開するというより、むしろ事例にもとづいて文法理論を組み立てるような方法を採用しているからであろう。

さて、はなはだ簡略的ではあるが上に紹介した諸説の中で、Michel の考え方にもっとも共感を覚えるのである。勿論、彼の研究は決して体系的ではないし、それどころか、確固とした客観的な証明も十分ではないところがある。にもかかわらず、示唆に富み、発展する可能性が感じられる。例えば、Michel の言う独立/依存という意味は、単独 (single) / 部分 (partial) というふうにも考えられるのではないだろうか。何故なら、perfect は、他の動作・出来事に関わりのない動作・出来事を表わし、一方、imperfect は、何か一連の動作・出来事の部分を表わすからである。換言すれば、imperfect は、他の動作・出来事とつながりをもってはじめて完全な絵になるような性質のものと言えよう。このように、他の動作・出来事との関係において存在している動作・出来事は、当然、前後の時間や状況に関わりをもっているものである。そのために、imperfect は、「繰り返される、推移発展する」動作・出来事を表わし、そのことが原因して、動詞形の本質が時間表現にあるようにみえるのであろう。

さらに、少々主観的な意見が許されるならば、このような perfect / imperfect の意味は、もって感性的なレベルにおいてよく把握されるのではないかと思われる。つまり、独立/依存の意味は、その動作主との関係において見る時、「動作主の独立した行為、偶然的行為」/「成り行き上必然的な行為」と取れないであろうか。例えば、「その人は、舌をもってそしらず (perfect)、友人に悪を行わず (perfect)、隣人への非難を口にしない (perfect)」(Ps 15 : 3)において、一の perfect 動詞は、それらが、期待される当然の行為ではなく、個人の選択による自由な行為であって、たとえ同じような状況のもとにあっても、別の時には、ひょっとすると異なる選択をするかもしれないような性質の行為であることを示している。同様に、「人の心を喜ばせる (imperfect) ぶどう酒」(Ps 104 : 15)に於いては、そのぶどう酒が、たまたま人を喜ばせるものだったのではなく、ぶどう酒の本性として当然のことであると言いたいのである。

あまりに感性の勝った見方は、言語学的な論理の筋道から逸脱してしまうおそれがあるが、要は、時間的要素を超えた感性の豊かな何かへブライ語の動詞形の本質ではないかということである。それは、aspect よりもいっそう主観性の強いものである。それが、いわゆる modus であるのか、あるいは、modus 的な要素と aspect の要素とが渾然一体となった複雑な容相を帯びたものであるのか、正確に分析することは難しい。そもそも、tense - aspect - modus は、それぞれが独立した文法カテゴリーでありながら、相互関係において一個不断の連続体であり、機能的にも意味的にも互いに交錯しているところがある。いずれにせよ、多くの現代語の動詞表現において、modus や

aspect よりも tense が勝っているのに対して、ヘブライ語動詞では、modus 的なものが——たとえ、それを aspect と呼んだとしても——優勢であると言えるのではないだろうか。

註

- 1 古典ヘブライ語動詞の aspect の問題は、この十年來筆者が興味を持ち続けてきたテーマである。この小論の目的は、何らかの結論を導き出すためではなく、ゆきつもどりつする模索の中で、現在の自分の視点を確かめるためである。
- 2 金田一春彦「日本語動詞のAspect」(1976) pp. 65~95
- 3 例えば、ユダヤ教内の文法家として、R. Y. Hayyûg (1000頃), R. Yona (1030), A. B. Ezra (1167), R. D. Qimhi (1235)等が、また、キリスト教内の文法家として、J. Reuchlin (1522), J. Buxtorf (1629), A. Schlensker (1750), N. W. Schröder (1798)等の名が挙げられる。
- 4 Kritische Grammatik der hebräischen Sprache, Leipzig (1827).
- 5 F. Hitzig, Die zwölf kleinen Propheten, Leipzig (1838).
- 6 A. B. Davidson, Hebrew Syntax, Edingburgh (1894); R. H. Kennett, A Short Account of the Hebrew Tenses, Cambridge (1901); M. Cohen, Le système verbal sémitique et l'expression du temps Paris (1924); C. Brockelmann, "Die Tempora des Semitischen," Zeitschrift für Phonetik und allgemeine Sprachwissenschaft V (1951), pp. 133-154; S. Moscati, An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages, Wiesbaden (1964).
- 7 "Die Tempora im Semitischen," Beiträge zur Assyriologie, VIII (1912), pp. 1-53; Historische Grammatik, Halle (1922); Zur Frage der Sprachmischung im Hebräischen: Eine Erwiderung, Halle (1924).
- 8 A Resurvey of Hebrew Tenses, Rome (1951).
- 9 O. L. Barns, A New Approach to the Problem of the Hebrew Tenses and its Solution without Recourse to WAW-Consecutive, Oxford (1965); A. Sperber, A Historical Grammar of Biblical Hebrew, Leiden (1966); J. A. Hughes, "Another Look at the Hebrew Tenses," Journal of Near Eastern Studies, XXIX (1970), pp. 12-24.
- 10 Das althebräische Verbum: Abriss der Aspektheorie, Uppsala (1961).
- 11 Tempora und Satzstellung in dem Psalmen, Bonn (1960).